

# 鵜沼

久久比奴末

はまゆう と 櫻貝 と

海光る わが 故里

第 2 9 号

内容 歌 詞 今 様

富士山

青柳通好画伯のこと

田中まさ子

『新編相模風土記稿』（天保13年、1842）に、「鵜沼村久久比奴末牟良」とあり、当時は“くくいむま”と呼んでいたことが分かる。

鵜沼を語る会 発行

六十年十一月号

(二十九号)

今様

富士

山たかし  
( )

今様は平安末期に流行した声楽で、鼓の伴奏で歌はれる。その時代として「今より」つまり現代風だと云う意味で名づけられたものである。七、五調四句の詩型を特徴とする。白拍子などによって歌われ、貴族界にも広まった。平安末期の後白河法皇の選出せられた梁塵秘抄は今様歌謡集である。

今様

○春

春の弥生の曙に

四方の山辺を見渡せば

花盛りかも 白雲の

かからぬ峰こそ なかりけれ

○古き都

古き都を 来て見れば

浅茅が原となりにけり

月の光は 隈なくて

秋風のみぞ身にしむる

附録

東雲節<sup>シノメヅシ</sup>

(1) 何をくよくよ川端柳

焦るるナントシヨウ

水の流れを見て暮らす

東雲のストライキ

さりとはつらいね

てなんとかおしやいましたかね

(2) 丸い玉子も切りよで四角

焦るるナントシヨウ

ものも云いようで角が立つ

東雲のストライキ

さりとはつらいね

てなんとかおしやいましたかね

○想夫恋

峰の嵐か 松風か

尋ぬる人の 琴の音か

駒をとどめて きく程に

爪音しるき

註 平清盛の怒をおそれて深夜ひそかに宮中を

去った小督（コゴウ）を高倉天皇の臣源仲国が探し

出すのである（平家物語に出ている）。

（昭和六十年十月記）

青柳通好画伯のこと

田中まさ子

本鵠沼の尼寺さんへ行く道は、青い麦畑を

はさんで、桃の花・菜の花の美しい敷物をお

いたようだった。

今日はこのあぜ道を伝って、人々が尼寺へ向つて歩いてくる。

「オヤ青柳さん、今日はどちらへ。」この土

地の名物通称（呑ん兵エさん）もやって来た

。「今日はね、アノ尼寺さんの落慶式でね

法要のおよばれで行きますの。」「そうですか、お立

派に出来ましたねえ。」「ええ、妙海さんも頃

海さんもおエライですよ。部落中を招んでね

お齋（トキ）が出るんですって。あたしはそのお齋が

楽しみなんですよ。』とニコニコして行き過ぎ

た。見れば、ズボンも洋服のひじにも別の大き

な切れで、あらい針目で縫いつけてあるが、

洗濯はよくされてあった。

すり減った下駄をはいて、やせた背中が桃畑

の間をひよろひよろと行く。

ここが鵠沼でなかったら、バタヤの町の住人と

見たであろう。この人が東京市長の田尻稻次

郎の子で、青柳家へ養子に入り、富有的な養家を

すってんでんに呑みつぶして了った、青柳通好画伯である

美校を出て、その才能はみとめられていた

のに、なぜ鵠沼で農家の物置（隣は豚

小屋）に住っていたのか解らない 言葉とか物ごしは上品ではあったが、

どう見てもコジキと変わらないし部落の人達は

画が高く評価されていることは知らないから、いつもお腹を空かせている、可愛相な画かきさんだと言って豚にやるような芋を持ってきて「食べなよ」と、置いていった。

金にも物にも執着を持たない、只お腹が空くことと、気分よく呑みたいだけのことに、生活があるのだった。画いても売れなかったし、売れる絵は画かなかった。戦争中は村人の頼む虎の絵を画いてやって、米や芋を貰ってくらしていた。

だがこの虎は千里行って、千里帰ると言うが、こんなに腹ばかり太っている虎は、本当に還って来てくれるだろうか、と村人は話していた。これを聞いた呑ん兵エさんは、「せめて虎ぐらい腹いっぱい食わせてやりたいんですよ」と言っていた。当時呑ん兵エさんばかりでなく、私達もお腹いっぱい食べたことがなかった。

戦争中はどこも同じ苦労はあった。私達移住者と、農村地区の人達とはまるで合わなか

った。みんな自分が生きることせい一っぱいで、凡て排他的とばかりも言えなかったが、こんな時、助け合う家族を持たない、呑ん兵衛さんはあわれであった。私の主人は青柳さんの画を高く評価していた。私も清潔な絵を今も覚えている。

食事時になると台所口から、丁寧なおぢぎをして、「今日は、奥さま」と入ってくる。

あ、又かと思いながら、三人分のぞおすいの中へ湯を入れてのばした。物足りぬ食事がすむ

と「おかげさまで、今日も食べました。」と

作法通り箸をおくと、又丁寧なおじぎをした

。私共も、東京を遠くはなれ、もう帰れないという  
思いは同じだった。

時たま松かさの落ちる音、松林にかこまれ

た小さな別荘の庭をのぞく秋の月、松籟、凡て芝  
居の書割のようであった。

青柳さんは立上がった。床の間に久しくおい

てある、三味線とバチを取り上げた。つぎの

当たったズボンの上にそれをかかえると、弾き出した

。長唄の「小鍛冶」である。私も主人も幼い小供も、只しゅんとなって聞入った。

「ひなもみやこも秋更けて降るやしぐれの初もみじー」と、朗々と唄いつづけた。

居つづけをして新橋中の芸者衆をはべらせたり、藤沢の新地でも芸者衆を驚かせたという音メ（ねじめ）だった。あざやかなものだった。

奇行の数々ある中で、この思い出だけは今もはっきり残ってあの頃の侘びしい思いも、今になれば得がた美しい夢の一こまである。

東京も鵜沼も、戦争がもたらす色々なことやなことが、日ましはげしくなってきた。

米も酒もなかった。呑ん兵エさんの生きる

場所はなくなっちゃった。

呑ん兵エさんが画いた虎の絵を持って、

出征した若者は還って来なかった。一つぱい

のおぢやを分け合って食べた弟も戦死した

。主人は出征となった。私は子供と海を歩い

て主人の還るのを待つ日々で鵜沼の海の広さを

青さを身にしみて感じた。

「奥さん方はい、よう。あたし達はごはん  
ごしらえや、小供の守なんか仕事の中に入っ  
ちゃあいないよう、別荘の子供は出来るのは当  
前だね」といつも、野菜のひき売りのおかみ  
達は言っていた。この鵜沼に土地も資産も  
持たない別荘ものは幼い子供と一生懸命に生きた。

時は流れ、人は老いて去りゆく、あの戦争  
のかなしさを、今書いておかなければ、と  
私はあせる。キレイ事ばかりでなく、もっと深  
刻な切つなさを書かなければと私はあせるのだ。

昭  
60  
ノ  
8  
ノ  
8  
原稿受付